

# 国語

(六〇分)

## 第1問

次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。  
解答番号は **1** ～ **15**。(配点50点)

「**ア**自動翻訳機があれば、英語学習の必要はないのではないか」と言うと、学生たちからは「機械で会話をしても、本当の心情を表現できないし、伝えられない」、「それができるようにするために英語を勉強して、自分で話せなければならぬ」などといかにも有りがちな答えがかえってくる。しかし、自分の気持ちを機械を使わず外国語で伝えられるほど、外国語が上手なのか。もつと考えると、母国語でも、自分の本当の気持ちを表現できたことがあるのか、ということだ。

(I)  
いずれも本当の心情を表現できない。だったら、翻訳機をつかうことで、それに近いことが簡単にできるようになる。言いたいことを相手の言葉にしてくれるにちがいがなく、しかもその精度はどんどん高くなっていく。

松尾芭蕉が翻訳できるのか、などと聞く人がいる。

もちろん、機械翻訳機では芭蕉を翻訳できないだろう。しかし、では、生身の人で、今までに芭蕉を正確に外国語に翻訳できた人がいるだろうか。一人もいないのだ。逆に、シエークスピアをそのまま日本語に変えられた人がいるだろうか。坪内逍遙も、福田恆存もできなかったのだ。

同じ日本語でさえ、古典文学を現代語訳した試みは多いが、谷崎潤一郎も※<sup>2</sup>大岡信も、原作と並ぶということにはなかつた。人力でもできないのだ。

機械翻訳ができないと言ったって、

A にすぎない。

私たちに翻訳機が必要とされる場面はどんなときか。  
インバンドで、<sup>a</sup>鄙びた地方にまで多くの外国人が訪れるようになった。ある旅館では、女中さんたちはすべての案内に翻訳機を使っていると聞いた。ご飯はどのように食べて、布団はどうしてほしい、といった細かい説明も翻訳機を使って行い、まったく困ることがないのだという。

(II)  
1964年の東京オリンピックの際には、ホスト国の責任として、国民みんなが英語を勉強しておいたほうがいいというムードが高まった。対して2020年大会(2021年大会)はどうだったか。コロナの問題が出てくる以前からそういう話はあまり聞かれなかった。翻訳機を各自が持てばいいのだ。しかも、英語だけではなく、中国語もベトナム語も翻訳できてしまうのだ。

業務用の文書を外国語に翻訳したい、学術的な研究を外国語で発表したい、そのような需要は昔からあつて、いわば英語帝国主義に支配されていた。非英語国民は最初から著しく不利な立場に置かれていたのだが、この翻訳機によつて、その **B** が解消されてしまった。文学的言語でなければ、機械的な無機的散文であれば、翻訳機は全く問題なく、正確に言語の壁を越えてくれる。機械翻訳の仕組みに乗りやすいような表現に変えればいいのだ。ちよつとした手間である。 **C** すべきことである。

<sup>イ</sup> 小学校教育の中に英語が取り入れられた。翻訳機がフ<sup>1</sup>キユウする以前の <sup>b</sup> 知見に基づいているのだろうか、早まってしまったと思う。ムダという <sup>カ</sup>、時間ももつたない。

そこに時間をかけるくらいなら、ほかのことを学んだほうがいい。  
やりたいと言う子がやるのは構わない。外国語を自由に操れる人材は有益

であろう。言葉を通して異文化の考え方、感じ方を学ぶことは貴重な経験になる。もっと気軽に外国へ行き、異文化体験を積むのはいいことだ。国内に  
来る外国の人と意思を通じ合わせられるのは、豊かな国を作るだろう。しかし、必須科目にする必要はない。選択制でやりたい人だけがやるようにしておけばいい。

### (Ⅲ)

学校で教えているのは受験勉強のための英語であり、勉強のための勉強であって、使える英語ではないということはずいぶん前から言われ続けている。使える英語を学ぶならまだいいとしても、それは翻訳機で事足りる。

ホテルの受付で「今日、部屋は空いていますか？」と聞きたいなら、翻訳機でまったくかまわない。

ただし、今のところ翻訳機にも弱点がある。

固有名詞に弱いのだ。人の名前や作品名などでも、無理やり訳そうとすることが多い。たとえば翻訳機を使って「私の名前は金田一です」を訳させようとすると「マイネーム・イズ・モダンワン」などと言いつけたりする。知ったかぶりをするのだ。翻訳できませんと言ってくるならいいのだが、機械はそのメンツにかけて無理やり翻訳しようとする。これはなんとかしてほしい。今のところ使う人間のチェックが必要ではある。こうした面の改善は待たれるものの、そういう癖があることを理解していれば、それほど困るものでもない。

チャットGPTなどがどこまで何ができるのか。珍回答のようなものを引き出しては、おもしろがっている人たちがいる。おもしろいことはおもしろいにしても、それでチャットGPTにダメ出しをしても意味がない。可

能性の大きさについてはしつかりと認めておくべきだろう。

機械は四六時中、世界中の場所から膨大なデータを集めてくる。だから、彼らの答えは、どうしても **D** になってしまふ。異端の意見を求めると、いかにも異端の意見が出てくる。本当の異端の意見は出せない。常識世界の中に留まる。今までに提出された誰かの意見にのっとる。完全にユニークではありえない。模倣なのだ。

### (Ⅳ)

小説や評論、詩などもチャットGPTでつくれるというが、それは無理だと思ふ。形としてはそれなりのものにはなっても、その良し悪しを誰が評価するのか。チャットGPTではない。生成AIは、作ることはできても、作ったものを評価することはできない。おいしい料理を作ることはできるけれど、おいしいがすることはできない。おいしい料理を作るようであつたら、もう機械がする意味がなくなってしまう。

文学作品を書くというなら、ある程度できるだろうけれど、それを批評する\*4。小林秀雄や江藤淳のような役割はできないだろう。ある程度のことにはやるが、程度がある。それらしいものに、機械が合格点をつけたとしても、批評精神を具えた人間が判定すれば、決してそういうレベルに到達していないのがわかるはずだ。いくら発達しようとも、小林秀雄が\*5。ランボウの詩を、<sup>c</sup> 玩味し賞味するようなことはできっこない。

絵を描くAIアプリなども出てきている。AIが作成する絵について、ゴッホ風、ルノアール風などといった言い方はできても、あくまで「風」ではない。ゴッホやルノアールの絵は描けないし、ピカソのオリジナリティは生み出せない。これから、ピカソの未発表作品が発見されたなど言うニュ

ースが出てくるだろうけれど、仕方ない。偽物は増産されるだろうが、だまされる人間がいけない。

俳句や短歌の投稿欄の選者は、恐ろしく大変なことになっている。A Iの作った作品が大量に投稿されてきているらしいのだ。そこからは選者の見識に頼るしかない。機械には到達できない領域、科学ではすくいとれない部分、そして気配のようなものがこれまで以上に大切にされるようになっていくことは疑われない。

ただし、確実な答えがあるようなことはA Iが答えてくれる。

### (V)

翻訳機を使えば、電化製品の取扱説明書やクスリりの説明書、科学雑誌にクイ<sup>2</sup>サイされる論文などは正確に翻訳できるようになっていくし、ある種の緊急事態の対処も、適切な方法を教えてくれるだろう。

便利なこととつまらないことは両面でやってくる。後は個人の考え方である。

その流れはもはや止められないところまできている。

目、耳、鼻、舌、皮膚の五官を通じて感じるものが「五感」である。

第六感というと別の意味になってくるが、五感とは別に「六感的なもの」があり、それが気配と言ひ換えられるのかもしれない。

目が見えない人は、空気の流れや音の変化、温度の変化などにはとても敏感だと言われている。彼らには違う世界が見えている。我々がなんとなく感じていた気配にしても、もつとはつきり感じられているのではなからうか。

目隠しをされていて、目の前に10人が立っていたとき、こっそり一人増えたり抜けたたりすればなんとなくわかるのもそういうことではないかという気

がする。

市川浩<sup>1</sup>という哲学者は、魚は視覚的にも触覚的にも自分のからだを認識できないコウゾウ<sup>3</sup>でありながら（自分のからだを自分の目で見ることでもない）、自分が魚の形をしていることをわかっている、人間も魚のように、見ていなくても身体感覚として了解しているのだらうと説いていた。人間にも自分を知る感覚はあるのだらうし、それが六感的なものに近いのかもしれない。

古武術などには、まったく力を使わず相手を投げるような技がある。インチキなものもあるにしても、実際にやれることもあるのだらう。常識では説明しにくいことでも、何かしらのメカニズムがはたらいているのにながしい。

これから私たちは、自動翻訳機やチャットGPTのような世界と、理屈では説明しにくい世界の両極と、いかに付き合っていくかが求められるようになっていく。そうしたところまでを理解したうえでコミュニケーションを取っていく必要がある。

金田一秀穂『あなたの日本語だいじょうぶ？ SNS時代の言葉力』

（暮しの手帖社 二〇二三年七月）より

出題の都合上、一部改変した箇所がある。

※1 福田恆存 II 日本の評論家・翻訳家。シェークスピアの作品を日本語に翻訳した。

※2 大岡信 II 日本の詩人・評論家。「万葉集」などの短歌を現代語訳した。

※3 チャットGPT II 人工知能を使ったチャットサービス。入力した質問

に対し、瞬時に回答が得られる。

※4 小林秀雄や江藤淳 II 日本の文芸評論家。

※5 ランボー II フランスの詩人。

問1 次の1〜3の傍線部のカタカナを漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、1〜3。

1 フキユウ

1

- ① コウキユウ的な平和を祈る。
- ② 組織の不正をキユウゲンする。
- ③ こまめに水分をホキユウする。
- ④ テストでキユウダイ点をもらう。
- ⑤ ゴムのキユウバンで固定する。

2 ケイサイ

2

- ① 秋の味覚がマンサイの食事をとる。
- ② 祖父の唯一の趣味はボンサイだ。
- ③ 膨大な量の石油をサイクツする。
- ④ 文化祭にはタサイな催しがある。
- ⑤ 外出のためテイサイを整える。

3 コウゾウ

3

- ① グウゾウ崇拜を厳しく禁止する。
- ② 紙幣のギゾウ防止技術が向上する。
- ③ 高額なゾウヨ税を支払う。
- ④ アイゾウ相半ばした気持ちになる。
- ⑤ チョゾウ施設を新たに建てる。

問2 傍線部 a「鄙びた」、b「知見」、c「玩味」の本文中での意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。

解答番号は、4 ~ 6。

a 鄙びた

4

- ① 何の楽しみもない
- ② 自然環境に恵まれた
- ③ いかにも田舎らしい
- ④ 落ちぶれた雰囲気のある
- ⑤ 長い歴史のある

b 知見

5

- ① 物事の正誤を確かめる基準
- ② 物事を体系化して作った規則
- ③ 物事の中核となる考え方
- ④ 物事が存在するための理由
- ⑤ 物事を見聞きして得た知識

c 玩味

6

- ① 隅々まで省略せずに読むこと
- ② 意味を考えて深く感じとること
- ③ 詳しく調べて確かめること
- ④ 文章をよく練り直すこと
- ⑤ 内容の良し悪しを判断すること

問3 空欄 A ~ D を補うのに最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。

解答番号は、7 ~ 10。

A

7

- ① 当てずっぽう
- ② ないない尽くし
- ③ 思いがり
- ④ ないものねだり
- ⑤ 意気地なし

B

8

- ① チャンス
- ② ハンディ
- ③ バイアス
- ④ バランス
- ⑤ タイムラグ

C

9

- ① 慶賀
- ② 畏敬
- ③ 懸念
- ④ 寄与
- ⑤ 駆逐

D

10

- ① 画期的
- ② 対照的
- ③ 多角的
- ④ 感覚的
- ⑤ 平均的

問4 本文からは次の一文が抜き出されているが、本文中の(Ⅰ)～(Ⅴ)のどこに入るか。最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、11。

だから、できないことはできないと理解しておくことも大切である。

- ① (Ⅰ)      ② (Ⅱ)      ③ (Ⅲ)      ④ (Ⅳ)      ⑤ (Ⅴ)

問5 傍線部 自動翻訳機 とあるが、自動翻訳機を使つてできるのはどのようなことか。次のa～eの中からその説明として適切なものを全て選んだ場合の組み合わせとして最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、12。

- a 外国語で自分の本当の心情を表現し、相手に伝えること。  
 b 外国語を日本語に変換し、相手の要求を理解すること。  
 c 詩歌を外国語に翻訳し、原作と同じ内容を表現すること。  
 d 日本語で書かれた論文を外国語に翻訳し、発表すること。  
 e 無機的散文を文学的言語に変換し、言いたいことを伝えること。

- ① a・d      ② a・b・e      ③ b・d  
 ④ b・c・d      ⑤ c・d・e

問6 傍線部イ 小学校教育の中に英語が取り入れられた とあるが、筆者はこのことについてどう考えているか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、13。

- ① 翻訳機を使えば完璧に外国語を話すことができ、英語を習得する意味がなくなつたため、英語の学習は時間のムダだと言える。
- ② 小学校で学習する程度の英語であれば、翻訳機を使って簡単に表現できるため、翻訳機の適切な使い方を学ぶほうが有益である。
- ③ 学校で教えられるのは受験勉強のための英語であり、生活で役立つものではないため、実際に使えるような英語を教えるべきである。
- ④ 学校では使える英語を学ぶことができず、小学生のうちにはほかにもつとやるべきことが多くあるため、英語を学ばせてはならない。
- ⑤ 英語を自在に操れるのはよいことだが、全員が学ばなければいけないものではないため、希望者だけが学習するべきである。

問7 傍線部ウ チャットGPT とあるが、筆者はこれについてどのような述べているか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、14。

- ① チャットGPTには人間とまったく同じはたらかしはできないが、その潜在能力の大きさは認めるべきである。
- ② チャットGPTの作品は人間の作品には到底敵たぐわれないが、その評価が逆転する可能性を認識しておくべきである。
- ③ チャットGPTには作品を評価できないという欠点があるため、利用することは避けるべきである。
- ④ チャットGPTは決して人間の代わりになることはないという点で、過度に警戒する必要はないものである。
- ⑤ チャットGPTは人間と同レベルの作品を生み出せないという点で、実用性に欠けるものである。

問8 傍線部<sup>エ</sup>「そうしたところまでを理解したうえでコミュニケーションを取っていく必要がある」とあるが、どういうことか。「確実な答え」「身体感覚」という二つの語を全て用いて、六十字以上八十字以内で説明せよ。

解答番号は、

15。

〔下書き用〕

80		60							

## 第2問

次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。

解答番号は

16

30

。(配点50点)

「自己とは何か」を問うとき、ただ「自己」にのみ目を向け、「他者」に目を向けなければ、その問いに対してほんとうの意味で答えることはできないのではないだろうか。「自」という漢字が、もともと体の一部である「鼻」を表したものであり、他の人を前にして自分自身を指し示すために用いられたものであったこともそれを示している。

この「自己」と「他者」の関わりに注目した思想家に、<sup>\*</sup>森有正<sup>もりありまさ</sup>がいる。森は<sup>\*</sup>テカルトやバスキルの研究者でもあったが、「経験」という概念がもつ意味に注目し、その上に独自の思想を築きあげた人でもあった。

一九七七年に発表した『経験と思想』で森は「経験」を、感覚が<sup>1</sup>タイセキ<sup>b</sup>、発酵を重ね、そのなから時代の流れに、つまり感覚が風化し、形を失っていくことに抵抗するものが生まれでてくること、そこから時を超えた形あるものが<sup>2</sup>ケツシヨウ<sup>c</sup>として説明している。そしてそこから「思想」が形作られていく。「経験」を組織化し、秩序づけ、普遍へと高めたものが「思想」である。ところが日本人の場合——ヨーロッパの人々と比較して——この「経験」の「思想」への成熟がきわめて困難であることを森は指摘している。

その理由を森は次の点に求めている。「日本人においては、「経験」は一人の個人をではなく、複数を、具体的には二人の人間の構成する関係を定義する」。ヨーロッパの人々においては「経験」のなから個人、あるいは個の主体性ということが出てくるが、日本人の場合には、個が、あるいは「私」

が出てこないというのである。

森によれば、日本人の「経験」から出てくるのは、つねに「二人の人間の関係」「つまり「あなた」とつながった「私」でしかない。そのように言うとき、「あなた」を前提にして「私」が自立してくるよう響くが、そのことを森は否定する。「日本人」においては、「汝」に对立するのは「我」ではないということ、対立するものもまた相手にとつての「汝」なのだ」と森は言う。「私」は最初から、たとえばある友人に相對する以前に、自分のなかに確固とした根柢を持つ「私」として存在していて、その上で「X」に相對するのではないし、また、その友人と出会うことによつて「Y」が成立してくるのではない。むしろつねに「あなた」がいて、「私」は、その「あなた」に對する限りでの何かあるもの(汝の汝)としてある。つまりその場合も、私は、真に「私」として、言いかえれば一人称として、あるいは「自己」として確立されるのではなく、つねに「Z」から規定されるという関係——それを森は「二項関係」とか「二項結合方式」と呼ぶ——のなかに閉じ込められている。

日本人の「経験」はこの「二項関係」という閉じた空間に閉じ込められている。経験されたものはこの閉じた——親密性をもつた——関係のなかでのみ意味をもつものとして、つまり、どこまでも個別なものとして受けとめられ、普遍化されることがない。また、新しくなされた経験もその親密な関係を<sup>3</sup>イジ<sup>d</sup>するようにすぐに形を変えられる。未知のものを未知のものとして受けとめ、それを既存のものと比較し、そこからより高次の普遍性をもつたものを作りあげていくことがなされないのである。それが「経験」の「思想」への成熟を妨げていると森は言うのである。

「自己」が「他者」を前にして「自己」であり、「自己」であることを意識するというのは、もちろん日本人にかぎられたことではない。誰しも、「他者」を前にしたときに、言わばそこから光を照射され、そのことによって「自己」がいかなる存在であるかを把握する。「自己」はそれだけで単独であることによってではなく、むしろ「自」と「他」との関係のなかではじめて「自己」であることを認識する。

そのような関係にあるとき、「自己」は「他者」に対してつねに、ある一定の「役割」をもった存在として相対しているということが言えるであろう。いまこの本を読んでいるあなたの場合、たとえば親として、あるいは子として、サラリーマンとして、学生として、といったさまざまな役割を担いながら、「他者」に対して。そのとき相手は、子として、あるいは親として、部下として、教師として等々の役割を担いながら、あなたに相対しているにちがいない。

そのようにさまざまな「役割」を担いながら生きているということは、私たちが、ある意味でたとえば親という仮面、子という仮面、学生という仮面というように、さまざまな「仮面」をかぶって生きているということでもあろう。ひよっとすると、この「役割」ないし「仮面」の全体、あるいはその集合が、私たちが一般に「自己」、あるいは「私」ということばで呼んでいるものだと「言ってもよいかもしれない。私たちははたいていの場合、私たちが演じるさまざまな「役割」の背後に、変わらない不動の「私」というものがあると思ひ込んでいるが、ひよっとするとそれは単なる思いこみであって、「私」というのは、結局のところ、さまざまな「役割」、あるいは「仮面」の集合にすぎないのかもしれない。

この「仮面」ということと関わってきわめて興味深い考察を行った人に、<sup>※3</sup>坂部恵がいる。

私たちは普通「仮面」ということを言う場合、「仮の面」という表現からも明らかなように、それをあくまで仮のものとする。私たちはあるシチュエーションのなかで一時的にある役割を演じるが、本当の自分は別のところにあると考える。その役割を「仮面」と呼べば、「仮面」の下にある「素顔」こそが自分であり、「仮面」はその「素顔」にたまたまかけられた覆いであるというのが、**A** であろう。

そういう見方に坂部は『仮面の解釈学』のなかで反対している。坂部はそこで、そういう見方は特殊近代的な見方なのだとこのことを指摘している。つまり **B** の論理によってすべてのものを分類し、そこに生じる対立を固定的にとらえる近代特有のものの方に基づいて、私たちは自己をも固定的なものとしてとらえる。そこに仮面と素顔という対立が生まれてくると坂部は言うのである。

坂部は「仮面」ないし「面」を「おもて」ということばで代表させているが、「おもて」という日本語は、「おもつへ(面つ方)」ということばが縮まってできたものであり、「うしろつへ(後つ方)」と対になったことばであった。その対になったもののどちらが「おもて」であり、どちらが「うらて」であるかは、相対するものとの関係で、あるいはシチュエーションのなかで相対的に決まってくるものであり、アプリオリにとちらかが本来のもの、あるいは仮のものとは決まっているわけではないと坂部は言う。両者はむしろ相互変換的であると言ってもよい。「おもて」と「うらて」とは相互にその位置を交換しうる、あるいは他に姿を変えうる(メタモルフォーゼしうる)。

のである。それにもかかわらず、近代においては、自同性の論理に災いされて、両者の関係を固定的にとらえることが一般になされている。そのように「変身(メタモルフォーシス)」の感覚を失ったのは、まさに、近代の病弊である、ということをや坂部はそこで指摘している。

先に述べたように、私たちは他者との関わりのなかでさまざまな「役割」を担いながら生きている。その「役割」を離れて「純粋な自己」というものがあるのだろうか。坂部はそのような「純粋な自己」の存在を否定する。「私」はつねに具体的な「役割」を担い、具体的な「仮面」をかぶって現れる。「素顔」もまたこの現れの一つなのである。「仮面」が「私」の「他者」であるとするれば、「素顔」もまた「他者」以外のものではない。「他者性」につきまとう。あるのは、具体的な形をとって現れたものだけである。ここでは「仮面」は「素顔」の **C** ではない。それは仮の姿でも、偽りでも、比喩でもない。そのことを坂部は次のように表現している。「仮面が素顔の隠喩であると同様な資格において、素顔は(何らかの(原型)などではなく)仮面の隠喩である」。

そのような観点に立つとき、「仮面」ないし「おもて」は、決して素顔から切り離された仮の面、あるいは **D** から区別された「表面」ないし「現象」ではない。むしろそれは「原初の混沌」、「カオス」が自在な変身のうちに「かたり」出されたもの、「かたどられた」ものにはかならない。「仮面」がそうであるように、「素顔」もまたこの変身の一つの形なのだというのが坂部の理解である。

私たちが「他者」に出会うとき、ある役割を担った、言いかえれば「仮面」

をかぶった「他者」に出会っている。「他者」もまた「仮面」をかぶった「私」に出会っている。そこで「私」は、あるいは「他者」は、ほんとうに「他者」に出会っているのだろうか。ただその表面を見ているだけではないのだろうか。

藤田正勝『日本哲学入門』

(講談社 二〇二四年一月) より

― 出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。

※1 森有正||日本の哲学者。

※2 デカルトやパスカル||どちらもフランスの哲学者。

※3 坂部恵||日本の哲学者。

問1 次の1～3の傍線部のカタカナを漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、

16  
18

1 タイセキ

16

- ① 敵陣から一斉にタイキヤクする。
- ② タイシン性の高い建物を作る。
- ③ 畑にタイヒをまく作業をする。
- ④ タイシヤク関係を解消する。
- ⑤ 母は外国にタイザイしている。

2 ケツシヨウ

17

- ① 文明のハツシヨウの地。
- ② エキシヨウテレビを買う。
- ③ 申し出をシヨウダクする。
- ④ 五輪をシヨウチする。
- ⑤ 功労者をヒヨウシヨウする。

3 イジ

18

- ① 食物センイを摂取する。
- ② 業務の一部をイシヨクする。
- ③ イタイな業績を残す。
- ④ 事務所をイテンする。
- ⑤ ジンイ的な事故を防止する。

問2 傍線部a「概念」、b「発酵」、c「アプリアリ」の本文中での意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、

19  
21

a 概念

19

- ① そのものの固有の形態
- ② 物事のおおよその意味内容
- ③ 目指すべき理想的な考え
- ④ 筋道が立った客観的な論理
- ⑤ 物事が変化していく経緯

b 発酵

20

- ① 徐々に腐敗し、朽ちていくこと
- ② 無意味なものを排除していくこと
- ③ 全く新しいものへと変化すること
- ④ 時間を経て次第に熟していくこと
- ⑤ 量的に増加し、豊かになること

c アプリアリ

21

- ① 絶対的
- ② 感覚的
- ③ 直接的
- ④ 確定的
- ⑤ 先験的

問3 空欄 A  
 ↓  
 D を補うのに最も適切なものを、次の中から  
 それぞれ選べ。  
 解答番号は、  
 22  
 ↓  
 25。

A  
 22

- ① 一般的な理解
- ② 普遍的な真理
- ③ 根本的な誤解
- ④ 逆接的な認識
- ⑤ 原始的な迷信

B  
 23

- ① 多様性
- ② 永続性
- ③ 同一性
- ④ 回帰性
- ⑤ 可塑性

C  
 24

- ① 近代の自我
- ② 純粹な自己
- ③ 単なる仮象
- ④ 自在な変身
- ⑤ 未知の具象

D  
 25

- ① ログス
- ② モラトリアム
- ③ ロジック
- ④ リアリテイ
- ⑤ アイロニー

問4 空欄 X  
 ↓  
 Z を補う語の組み合わせとして最も適切なもの  
 を、次の中から選べ。  
 解答番号は、  
 26。

- ① X || 私
- ② X || 私
- ③ X || あなた
- ④ X || あなた
- ⑤ X || あなた

- ① Y || 私
- ② Y || あなた
- ③ Y || 私
- ④ Y || あなた
- ⑤ Y || 私

- ① Z || 私
- ② Z || 私
- ③ Z || 私
- ④ Z || あなた
- ⑤ Z || あなた

問5 傍線部<sup>ア</sup>「そこから光を照射され」とあるが、これは何をたとえているか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、

27。

- ① 未知の「他者」が新たな「自己」を照らし出してくれること。
- ② 「他者」との親密性の度合いで「自己」の輝きが変わること。
- ③ 「他者」とは「自己」を映し出す鏡のような役割であるということ。
- ④ 「他者」によって隠したい「自己」が暴かれるということ。
- ⑤ 「他者」との関係性によって「自己」を認識するということ。

問6 傍線部<sup>イ</sup>「近代の病弊である」とあるが、どういふことか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、

28。

- ① 近代的なものの方による悪影響だということ。
- ② 近代的な考え方が徐々に失われつつあるということ。
- ③ 近代になって精神的安定が損なわれたということ。
- ④ 近代の考えは今までと一線を画しているということ。
- ⑤ 近代特有の悲観的な価値観を生み出したということ。

問7 傍線部<sup>ウ</sup>そこで「私」は、あるいは「他者」は、ほんとうに「他者」に出会っているのかとあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。次のa～eの中から適切なものを全て選んだ場合の組み合わせとして最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、

29。

- a 日本人は「個」や「私」を打ち出すことがないから。
- b 「仮面」によって「素顔」が隠されてしまっているから。
- c 「私」とはさまざまな「仮面」の集合にすぎないから。
- d 「役割」を離れた「純粹な自己」は存在しないから。
- e 「素顔」もまた姿を変えた「仮面」の一つにすぎないから。

- ① a・b・e
- ② b・c
- ③ b・c・e
- ④ c・d・e
- ⑤ d・e

問8 本文の内容に最も合致するものを、次の中から選べ。

解答番号は、

30。

- ① 日本人が「経験」を「思想」へと成熟させることが困難な原因は、「他者」からの評価にもとづいて「自己」を表現する考え方にある。
- ② 日本人が親和性をもった関係のなかで「自己」を規定するのは、未知のものを受けとめることに抵抗を感じるからである。
- ③ 私たちは、「他者」に対して「役割」をもった存在として相対している以上、つねにさまざまな「仮面」をかぶって生きている。
- ④ 一時的な「役割」を演じている自分とは別のところに、本当の自分が存在しているという考え方は、近代になって否定された。
- ⑤ 私たちは、つねに「仮面」をかぶった「他者」と出会っている以上、変身する前の「素顔」の感覚を失うのは当然のことである。

(国語問題 終わり)